

故郷第八場面 読んだ読んだ

三年四組

氏名

母とホンルとは寝入った。

わたしも横になって、船の底に水のぶつかる音を聞きながら、今、自分は自分の道を歩いてるとわかった。……もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。



主人公は、ルントウが願っているだけで行動に移さない「偶像崇拜」をしていることをバカにしていたが、ホンル達に向けた、自分たちやルントウ・ヤンおばさんのような生活ではなく新しい生活を送ってほしいという希望も同じであり、偶像崇拜を自分もしていることに気付く。そして、主人公は、みんなが行動すれば、希望が実現するということに気付く、歩き出すのだろう。

鲁迅は、希望は願っているだけでなく、みんなで行動していくことが大切だと伝えている。

主人公は、これから新たな一歩を踏み出そうとしている。それは、文末の六行からだけではなく、八場面の最初から考え始めていた。

初め、ルントウを偶像崇拜と笑っていた。敷かし、主人公はそのうちに自分もルントウと同じと気付く。このときに、自分のことを認めるという行為が前に進むように思える。そして沿い脩的に自分の思い、考えを述べることには「歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」という言葉からも自分自身が歩く人となるようにしていることがひしひしと伝わってきた。

主人公は歩み出す。なぜなら、鲁迅は当時の中国を変えようという熱い思いをもってこの故郷を書いているのだ。主人公が歩み出さなかったら、一人一人が自分から行動を起こさなかったら、今と次の世代に変化はないだろう。

主人公はルントウを偶像崇拜だと笑っていたが、自分もそうであることに気がついた。希望があっても行動をしなかった主人公は、最後の一文で決意を述べているように感じる。主人公は今まで「歩く人」になれていなかった。だから、これから主人公は、歩く人になるために行動するだろう。

主人公は、ルントウが皿など使えるものではなく、香炉や燭台を所望したことを「偶像崇拜」と笑っていた。しかし、主人公はホンルとシェイションに新しい生活を持ち、自分とルントウのようになってほしいという希望を密かにもっている。これは主人公がいくら押んでも何も変わらないのが現実なので、主人公もルントウと同じように「偶像崇拜」であると気付いた。

作者は、この二人の「偶像崇拜」を、中国の現状と結びつけているのだろう。良い国にしたいと思っても、それを行動に移さなければ、主人公の故郷や人柄のように、どんどん悪い方向に行ってしまう。しかし、最終的には、それに気付いた人々が変わっていくように感じられる。このことから、主人公は歩み出していくと考えられる。

さん

さん